

は宿直室へ籠って句作した。——この運動場の隅には大きな雨天体操場があつて、平台の立派なピアノが据えてあつた。樹人君の宿直の半夜の相手になりに行く代りには、樹人君のピアノを聴き楽しまうといふ料簡も勿論あつた。樹人君は弓張提灯をつけてがらんとした建物の隅に陣取ると、古めかしく照らす提灯の燈をたよりにピアノを弾いた。夜更けのピアノは面白いほどよく響いた。果ては気味悪いほどよく響いた。何時か樹人君も弾きく／＼夢中になつてしまひ、私達も聴きく／＼夢中になつてゐた。たま／＼、ポルカや元祿花見踊なんかを聴いてゐると、闇をいゝ事に私は踊りだした。踊るといつてもたゞ手と足をじたばたやるに過ぎなかつたし、その手足さへ真暗闇なのだから自分にも見える筈がなかつた。だから私は安心して独りで踊りつゝけた。近くに黙つて聴惚れてゐる苔雨君も、よしを君も知らう筈はなし、離れてピアノに掛つてゐる樹人君ももとより知らう筈はなかつた。さう思ふと、誰にも知れずにすぐ近い闇の中でピアノに遅れまいと急がしく手足を振り動かす自分が、ふと、ピアノに浮かれて闇の中へ現れた化物のやうにも思はれてやたらにをかしかつた。

そのピアノの傍にはオルガンが一台あつた。或る晩苔雨君がそれを見付けると、苔雨君は勿体ぶつて前に腰を据えると片手を動かして弾きだした。多分冗談だらうと見てゐると、それが「神よみもとに近づかん……」といふあの断末魔の讚美歌の旋律になつて、苔雨君はすましてそれを終りまで弾いた。それには尠からず驚かされた。

同じ場所である晩、最近僕がすゝめて俳句をやりだした……といつて樹人君から紹介された人があつた。脊のひよる高い柔和な人で、見たところ学生らしくもありまたさうでもないやうに思へたが、それが佐々木摩山水君だつた。当時摩山水君は農科大学生だつた事は後になつて知つた。

かうした俳句に熱心になつて行く一方、私は学校の方はますます面白くなつた。学校へ行くつもりで出ても途中から気をかへて、上野や日比谷の図書館通ひをよくやつた。が、図書館でも、明治二十年頃の新聞を読んだり、古川柳をノートにとつたり、医心家など、いふ古いものを探して書拔を作つたりする日が多かつた。一時江戸の句のしみで、ゐるグロテスクな美に興味を持ちだして、安政の大地震大火事の錦絵などを片端から眺めだすと、其の興味はやがて、幕府政刑図譜？とか、応挙の難福図といふやうなものにも及んで、この政刑図譜の不気味さにはさすがに怖くなつて、当分は食事の度に胸が一ぱいになつて弱つたものだつた。

(大正13年5月・6月 曲水917・8掲載)

「未完」